

栃木県

書道連盟

会報

第12号

栃木県書道連盟
会長 白石和
〒321 宇都宮市今泉1-17-8
TEL (0286) 33-4063
編集事務局
振替口座 宇都宮4-9017
〒321 宇都宮市築瀬町2039
(会計) 増渕春雪
TEL (0286) 35-3321
印刷 宮本印刷

会報の題字について

副会長

斎藤 笙風

書道連盟紙のタイトルが二年前から、活字体より今の書体に変更しました。

この時に説明不足のために、時々どなたの書でずかと質問されます。私が副会長に選ばれて、最初に疑問に思ったことは、なぜ活字体なのか不思議に思いましたが、無難な活字体にされたのではないかと考え、やむをえない最良の方法であったかなと思いました。

しかし、何か方法があるはずというろ考えて見ました。西安の碑林にある集字聖教序は王羲之の書を唐の僧懷仁が集字して建てた碑の例もある事ゆえ、この方法ではいかかと、何冊かの書道辞典から集めてみたのですがどうもしつくりまとまらず、また栃は載っておりませんでした。困ってもう一度書棚を調べましたところ「鳴鶴先生楷法字彙」が見つかりました。

日下部鳴鶴(一八三八—一九二二)は書壇の祖とも言えるほどの書家で、現在の書の多くは、この流れを受けていると考えて良いのではないで

ようか、この字彙から書道連盟の集字はできましたが、栃の字はどうしても見つかりませんので、やむをえずこの三字は明朝体の活字になってしまいました。

先日、所用があり、栃木県高齢者センターの推理事長をお訪ねしたおり、上海の老人大学の学長始め多くの方が、寿を寄せ書してある全紙大の額を拝見しました。その中に〇木県……と書いてあります。当然栃であるのに、栃を草書に崩した字とは考えられませんが、理事長の説明によりますと、栃は中国ではあまり良い意味ではないので、変えて書いたそうだが、栃は国字で、中国の人には判らないはずなので、なぜ変えたのか疑問に思いました。話に因りますと、千葉県のチバを中国語で発音するとあまり良い意味ではなく、意味深に笑うとのこと。栃のトチも同様のことなのでしょうが、私には判りません。

このような事情で、栃木県の名の由来

に興味を持って調べてみました。

栃木市から栃木県の名が付けられましたが、この名の由来は、神明宮の社殿が栃木城内村にあった頃、屋根に十本の千木がついており、当時は人家も少ないので、遠望するときに人々は神社のあたりを「十千木」(とちぎ)と呼ぶようになったという。また、千が十集まると万になるので、千木が十という意味で木へんに万で書くようになったとも言われています。

栃木県、榛木県、栃木県、さらに「木」へんに「万」を「萬」で「横」、さらに「横」と書いたりしたそうですが、明治十二年に統一されました。

また、元来は「枋」であるところを、大蔵省の役人か、栃木県の官印を篆刻した職人が間違つて「」(がんだれ)を「万」に付けてしまったことに由来するそうです。

タイトルの話から脱線しましたが、話の種になるのではないかと駄文を綴りました。

会費納入のお願い

誠に申し訳ございませんが、会費未納の方は、同封の郵便振替をご利用下さい。

尚、総会時の会費受付は混雑し間違いのものととなりますので、郵便振替をご利用下さることをお願い致します。

栃木新聞

明治七年五月十五
計 栃木新誌 第九



第42回

栃木県書道連盟会員展
批評会

会期 平成三年五月十六日～五月十九日
会場 栃木会館上・下ギヤラリ

批評会講師 佐藤 中処先生(毎日展審査会員・貞香会顧問)

(佐藤中処先生のことば)

中井先生初め大先輩の中で、松本君から、順番で一回ぐらい顔をだしてほしいと話があり、まいった次第です。大きな会に属していないので、視野が狭く不安、たつての要望なので邪魔した次第です。

栃書連盟会報で中井氏が書かれていますように、書の技術は戦後すすんだ。また小野寺啓二氏の十年の歩みの中で痛感した。今、一つの転換期に入った。書の本質、精神面、内容が問われる。これからの我々のあり方、痛感、改めて再認識した。

(増渕春雪氏) 線、いい。字

が揃いすぎた。回転部、デフォルメ、どうするか? (松本宜馨氏) 少し速い。「楽」の字、渴筆、速い。終りいい。(山田香耶氏)

いい作品、潤渴の渴、さびしい。広がりあっていい。行が寄っている。「清」の字から渴、一行まとまっている。「自」かたい。(森山湖葉氏) ことばにこだわ

りすぎ、少し変化足りない。ことばは道徳的なのでおきな変化はいらないが、「時間の中に」大きくなっている。初めあきすぎ散漫になっている。落款成功。(吉田典生氏) 若い人の書か?

線いい。「薔薇」複雑の線、「一」とどう処理するか、下の「一」のため、薔薇小さく見える。かたい字にとらわれた。大体よろしい。(吉田芳洞氏) 落款いい。書き

なれている。本文かたい。「自香」自から香の線、弱い。「幽花」の幽かたい。他はうまくい

っている。(村田幽香氏) なか

なかい。全体の配置いい。しんによう、きいていて面白い作品だ。(吉田景堂氏) 主観に

なるが「帰」はもっと広がっていい。「月」が動いていて、「帰」を旁の方もと広がりがあっていい。手法わからない。「帰」と

「月」の関係だと思ふ。初めいい。(谷口宇栖洞氏) 「平」が二つ、「不」揃っている。変化はついてるが、「人」を小さくして、「平」を大きくした方がいい。人の右画小さく、字として面白い。「流」の二本の線、

他の線にない。異質になる。考える余地あり。(赤澤豊氏) 下二行うまい。「春暁」、これだけ勢いつけていいか? もつと静かに、詩の気分から言ううと強すぎる。若さがでた。(井口五百枝氏) ことばの静かさでている。

「心」が大きい、本来なら逆なのだが、効果はあがっている。「華」の下部、長くいいと思う。

さびしい。印の位置、気になる。さがったか、どうだろうか。(新井幽秋氏) 一寸古いが、きちつと彫れている。へ句にあったように彫った。「茶」の字、気になる。「喫」まとまっている。

(荒牧桂舟氏) 「和」いい。「動」線に息が切れた。動の頭のところが問題だ、一工夫を。呼吸線、好きでない。(高橋日傳氏) 飄飄としていて、気に入っている。線がいい。他に言うことなし。枯れた自由さ、墨色、技巧的でなく自然、いい。(飯

野彩心氏) 「獨」が大きい。「大」「峰」いい。獨坐、平凡、真中で、大雄しめすぎた。もう一工夫を。(石川

茜祥氏) 筆がよく動いている。やわらかい筆で書いている。縦線がかたい。特に「白」かたく

弱い。少しなれない。全体をはめたが、落款かたい。(石川六濤氏) なかなかいい。書きなれ、うまい。「世」

気になる。ち

ちまった。横に広げた方がよかった。(江本ちゑ氏) おおらかに終りいい。初めのところ広がり大きすぎた。二行どうするか。二行目、異質、「聲」処理? どうするか、これからの課題、他はいい。(生沼冬情氏) 真面目な

隷書、隷書の筆法はでている。整然としたところが良さだが、線を入れるとしまってしまう。大変きちつと書けている。「萬籟」の籟、小さい。結体面白く書きすぎた。一番難しい。破綻になる恐れあり。「佳」の頭、気になる。(嘉久和尚道氏) 淡墨、この文字にふさわしい。やわらかさい。墨色から言えば、出

ち



来あがつている。字がかたい。技をきたえないといけない。線に氣をつけるといい。(小川仲秋氏)ムード派、墨の配置いい。渴筆生きている、面白い。言うところなし。へ細い筆で書いた。『兼』が縦に長すぎたか。印の大きき大きすぎ、小さいのを。(石田鶴郎氏)大作、いい作、変化あり。墨のせ方なれている。縦の線がかたい。『柳』など、スピード感がどこか似ている。少しかたい。縦画、問題だ。(大浦舟人氏)よく出来ている。批評できない。(大谷津紫水氏)ペタンだ。配置いい。『趣』渴筆大きく出来上っているが、動き小さいか、もう少し大きくした方がいい。少し速い、ゆつくりと。落款うまい。(大島静彩氏)高野切、線の変化ない。臨書の難しさは大きさが出にくい。大きさがでない。もう少しし字に広がり。圧倒されてしまったか。(乙川玄洞氏)意とされるところいい。一つの流れをもつてゆく。『山』が大きい。縦線、長い。『雲』さびしい。『山』が低ければもっと生きたのではないか。(大谷津隆芳氏)配置はいいが筆が速い。勢いがありすぎる。最後の筆、大事だ。ゆつくりと書くといい。(木曾梅邦氏)結構だ。なかなかいい。

大分やつている。配置いい。出来ている。言うことなし。(木村瑠石氏)可愛らしい作品だ。句から言えはいい。さびしい。最初のかたまり難い。どう展開するか?ことばにあつていている。いい。『抱』が難しい。二字、揃いすぎ、抱、背が低い方がいい。少し小さく。(塚原秀巖氏)なかなかうまい。大分書きなれている。二字の作品は難しい。寸法をあわせすぎたか。『俛』の字、下の旁、離れすぎたか。『宝』を大きくした方がよかった。(川口青芳氏)いい配置だ。潤いいい。終りいい。一行目かたい、他はいい。(寺内聖華氏)変化はついていいるが終筆の部、少し軽い気がする。『懼』りっしんべん下りすぎた。どこに位置させるか問題だ。四字縦におさめるのは難しい。(下司香雪氏)『情』の字か?大体出来ているが落款は情のりっしんべんの下に入れるかなあと考える。(中津原軒陽氏)いい線だ。落款、渴筆いい、ペタン。『不』と『和』の関係、構成が似ている。和が小さくいい。しめた方がいい。『同』が小さい。(築島芳園氏)構成いい。広がりあり、出来上っている。下の二点に変化がなさず

ざる。重さのこと気になる。(中村礼子氏)大体書けている。『少』の字をどうやるか、少し上にあけておいて、斜線を生かした方がいい。筆は羊毛か?落款が一寸気になる。(長井椿州氏)『心事』があつて下にこうもつてきたのだが、『知』気になる。ちぢまつてしまった。『故』いいが知でこわした。(西脇紫竹氏)『平』の字、きつい。『安』の字、太くて重い。『無事』はいい。平安、問題だ。はりきりすぎ。(日賀野琢氏)今井先生がよくやつている。一生懸命やつている。なかなかいい。字が少し大きい。小さくしたら生きてくる。若い人はいいい。(古橋洋舟氏)線がきたえてある。大体出来上っている。『杯』の字、ちぢまつた、横に広がったらよかった。(石川澄子氏)大分やつている。線、なかなかいい。『窓』の線、単調、かたくなつてしまった。(足田和勇氏)少しおとなしい。紙面の真中にすすぎた。位置が問題だ。印の位置と大きき気になる。平凡だ。(増山恭晏氏)線、いい。長くやつている。全体バラついていいる。構成としてしめた方がいい。大小のつけ方が足りない。似たもの、ばらつとしていいる。(本多雨情氏)ペタン。落款が問題。同字、タ

『二』(久津美碧洋氏)いい。なれている。出だしは小さく、二行目『臺』の字があるから、氣持を小さくした方がいい。落款いい。(小森梅寿氏)『心』の点、上まであがつた。左側のことは書きこれが難しい。このやり方、本文に負けてしまう。二行目の下、位置工夫を。横に入れるのは難しい。ことば書き入れない方が無難だ。(孤塚雲外氏)どんな筆かな?『羊毛』落款いい。ゆつくり書くといい。かたさとれたかも知れない。(小林正韻氏)『澄心』いい。『静』の終り、まわってくる線、もつとゆつたりと。『慮』いい。(藤原松情氏)一応まとまつていいる。出だし大きい。『帰』横に広がりがあつていい。(佐藤堪氏)顔法か?書きなれている。いい。下部、大きい字が集まりすぎ。上と下の構成一寸違う点が問題だ。線はいい。よろしい。(斎藤和子氏)細くまわってくる回転の線、一寸速いか、この細い線、単調、ゆつくりまわして深みを。(兼目悠久氏)『森』の終りの縦画、私は求的に書く方だが、『佳』の部、しめた方がいい。広がりを見せるなら『萬』どうするか、平凡だ。どちらかに寄せるか、大きくするか。齋藤美与子氏)筆は?『羊毛』

一寸速い。もつとゆつくりと書いていい。構成いいが、印の位置、一工夫を。(酒井真沙氏)いいなあと見て見えた。ペタン。申しあげることなし。(酒井淑子氏)一生懸命書いていいるのはいいが、字の間隔をつめるかした方がいい。隷書を新しくすると一寸古くさい。形におわれうっかりすると古くさくなる。どう現代に生かすか、課題だ。(菅保青洋氏)若い、元氣だ。『静』の字が問題だ。創作性がでない。『雅』変化つけたが、静、広がりを。雅にくらべ、静、さびしい。(関口恵美子氏)真面目な臨書だ。きつい。『其二・三画の縦、下まで出る。少しさみしい。創作性足りない。落款、もう少し右に、字をもう少し大きくしていい。(高橋竹瑞氏)書きなれている。いい作品だ。面白い。字の変化もあり、結構。(竹澤麗舟氏)二字とも構成どこか似ている。変化ほしい。揃いすぎ、空間似ている、問題だ。『寿』をしめた方がいいか?どちらでもいいが。線はなかなかいい。(高梨峰鶴氏)これでいい。書きなれている。落款いい、結構だ。三字、三字、でいくか、いかないか問題だ。『松』あわない。行の字数を揃

えたのが欠点だ。(館沼天游氏)
変化ありい。落款の位置、いい。湯筆部、ゆつくりとした方がいい。筆を静かに。「香」のかすれの線が面白くない。その他いい。書きなれている。

(講師総評)

たくさんさんの作品、毎年増えているとのこと、同好会の良さ、作品の良し悪しも大事だが、何をどのように表現するか、例えば、静かな歌をはげしく書くということは破調になってしまう内容に対する配慮がなければならぬ。内容にあわせた作品が多かった。参考になった。これからも頑張っている。

(文責 大谷津紫水)

会費納入のお願い

会費は必ず郵便振替で納めることになりました。

会費未納の方は、同封の郵便振替でお振込み願います。



背に残ることば

七海 水明

『おいっ、若いの、もつとしつかりやれ。』まことにわかり易いことばである。筆頭にこのようなことばを書くと、『おどかすつもりか』などと受けとられるかも知れない。

実は、こういうわけである。

私は、去る三月二十二日の午後どこへ行つて何をしようともきまずにバスで市内の繁華街へ出かけた。午後六時までは三時間余りの餘裕がある。県庁前で下車、何かやっているだろうと県の総合文化センターへ。第一ギャラリーでは個人の写真展があった。私に写真がわかる筈はないが、一見してこれはおもしろいと思った。いろいろの花の姿が心を美しくしてくれるような気がした。六十何点かの作品にそれぞれ心があり、作者のことばをきくこともできてかなり意義ある時間を持つことができた。書に於ても解決されるべきまた求むべき姿など、好い日だったなあと、思うことの一つの条件を心にとめることが出来たような気がした。帰ろうと思ったが、どう利用したらいいかなと思いつけていることもあったので第四ギャラリーへ行つた。

栃木県老人クラブ連合会主催の所謂老人たち(私は心では失礼な、お粗末なことばで申し訳ないと思っているが、私自身も老人だからという意味でのことば)の心のこもった作品が会場に溢れるほどで、郡市別に見事に展示されていた。連合会事務局の方々の御苦労がうかがえた。作品の種別もまことに多種多様、その巧拙など問題外であることは勿論だが、その労作振りが、そして楽しみながら、目をかがやかせ、年令を忘れての昨日今日そして明日。日に次ぐ日美しい人生の創造に、ひたすら突っこんでいく身心共にすこやかな姿に圧倒され、頭が上らないといった方が本音である。私はこのことを忘れてはなるまい。事務局長さんのいろいろのお話を伺ったりして、見て良かったという満足感で階段を降りた。その時私の背に迫ってくるものを感じた。どの作品にも作者の心が十二分に籠められていた。言いかえれば作品を支えていた心の聲であった。

『おいっ、若いの、もつとしつかりやれ』ということばが私の背に深くきざみ込まれたような響きであった。

たしかに私は、出品者の皆さんから見ると、まだ八十に満たない者ということになる。大先輩からのありがたいことばであった。

連盟古舟賞

連盟賞を受賞して

中原 紅 驥

この度は、名誉ある連盟賞を受賞させて頂き、誠に恐縮しております。栃木県書道連盟の会員になりました初めての年のこと、緊張と歓喜に一瞬のうちに包まれ、その感激は生涯忘れないものと思います。と同時に現在の自分の努力不足を省みるよいチャンスと、謙虚に受けとめてゆきたいものと覚悟いたしました所存であります。これからの長い書道人生、自分の書に責任をもつて表現していきたいと思えます。本当に有難うございました。

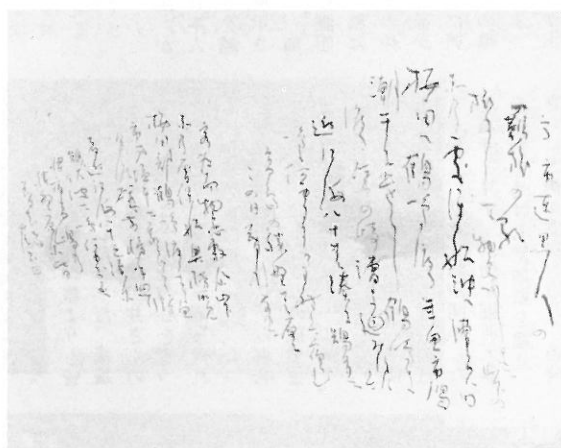


感謝の辞

高橋 竹 瑞

この度は、はからずも賞をいただき誠に有難うございました。連盟展の四日前まで同じ会場にて、私の傘寿記念の個展を催しておりましたので、この度の賞は、私の傘寿を祝って下さったような思いで、一層の意義深い賞となり感謝申し上げます。

今回の作は右ブロックを大きく、左ブロックを小さくして遠近をはかり、澄んだ全体の空間を念じて書きました。が力不足でした。今後ともご指導ご叱正を賜りますようお願い申し上げます。



連盟賞を受賞して

鈴木 源 泉

思いがけなく連盟賞をいただき、ありがとうございます。

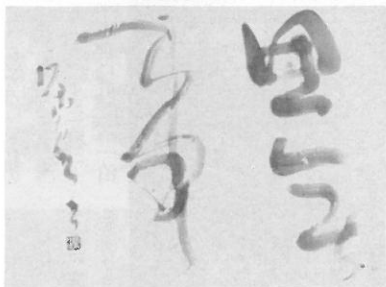
受賞作は、「思無事」。あの時は、中央展出品づくりの四苦八苦の状態、焦りと汗の中、ふと気晴らしになにげなく書いたものの一枚だったように思う。

人間には誰にでも欲がある。「さあ、写真を撮ります」と言われると誰でも「カッコ」をつける。しかし、この写真は本物ではない。書もスナップ写真のように自己を意識せず、無欲、無心で自分を出せたものがよいに決まっている。が、私には無理難題。

ある書家が紙上で「人間は、ショックを受けたら、驚いたりしたとき、そこに大きな感動が生まれる。その度に様々に変化をしていく。また、その人その人生を左右することもある。そして、人間は謙虚でなくてはならない。しかし、自信は持たねばならない。」と話していた。

いつになったら自信が持てる程になれるやら…。私は相変わらず何とも頼りのない日々を送っているような気がしてならない。

今後とも、諸先生のご指導をよろしく願っています。



第四回研修旅行

東北の文化を訪ねて

高 梨 峰 鶴

昨年は、多胡碑を訪ねる旅だった。今回も参加者は少く昨年を上回ること僅かに五名、男十六、女十八の三十四名。毎回の行事等に感ずることであるが、多くの会員を擁する県連盟の行事への参加者が何時も一割にも満たないと云うことである。少しでも多くの会員が参加し同じ屋根の下で一泊ではあるが寝食を共にし、同好の誼みを助長してゆくことが個人のみでなく、連盟を守り立てて行く力に繋るのではないかと思う。次の旅行にはより多くの参加を見たいものである。

七月二十八日八時東武西口を出発。バスの中の大半は何時もの顔ぶれで冗談が飛び交い、のど自慢の歌声を乗せて東北道を一路北上。那須高原、安達太郎で休憩。仙台宮城ICを降りて、青葉城・端宝殿の説明などをガイドさんから受け、やがて広瀬川、こんな街の中で鮎が釣れるとか、バスの中までせせらぎの音が聞こえて来る様な清流である。三の丸 隅櫓を経て、県立美術館に到着、開館十周年

記念特別展の「昭和の絵画」が開催中。洋画ではバリの日本人画家の作品やその他五十点を越す作品が、また日本画も展示されていた。その外高橋由一、仙台で育った中野和高等の絵画四十余点も展示されていた。私は絵は良くわからない。別室の佐藤忠良記念館には見事な作品がズラリ、私はむしろこの方に興味覚え、これ等の彫刻作品の鑑賞に大部分の時を費してしまつた。再度訪ねて見たい作品が沢山あった。ここを後にして青葉山の成田山園分寺で昼食、日本一高い不動さま。皆がそれぞれの願いを託しお腹も一杯になつたところで記念写真、皆の顔がどことなく笑ふ不動様に似ていた。十三時四十分鳴子温泉を左に見ながら狭い路を百六十米程の日本こけし館へ。何千と陳列された伝統こけしは見事である。こけしはやはり昔の作が良い、郷愁と渋味がある。パンフレットの中に「いささかのこけしは古びあせたけれど、わが若き日の旅のしるしぞ」とあった。少し奮発して渋味のきいたのを手

に入れてきた、旅のしるしに。十六時過ぎ鳴子観光ホテル着。この夜は、前二回の旅よりも皆がリラックスしたようだ。遙遙千葉から参加した茂田井さんのすごい舞いは一際皆の心を奪った。おどりに歌に温泉郷も破れんばかりの夜は更けていった。翌朝九時、古川I、Cから東北道を北上、こしひかりの故里金成平野衣川を車窓に、一の関I、Cを降りやがて左手に巖美溪、顔面まがいの岩、磨崖仏の北限とし貴重な史跡である達谷窟近くを経て、慈覚大師が開基した毛越寺を見学、基衡が掘河天皇の勅命を受け七堂伽藍を建立、さらに秀衡が堂房を造り、当時堂塔四〇僧五〇〇を数える等、中尊寺を凌ぐ程だったとか。度々の火災でその大部分を焼失したと云う。八〇〇年前の栄華を偲ぶにはその広大な荒れ果てた庭園と保存されている建物の幾つかの礎石等にたよるしかなかった。十一時四十分最後の見学中中尊寺に到着。金堂を見学したのは初めてである。八六〇年前堂塔四十僧房三百余と云うからすごいものである。建武四年(一一三三)野火でその大部分を焼失、金堂と経蔵のみが残ったとか。初代清衡から基衡、秀衡と平泉滅亡まで約百年、将に

芭蕉の奥の細道に云う「三代の栄耀一睡の中にして」である。ここで晝食をとり、十三時三十分東北道を宇都宮に直行。一泊

二日の旅であったが、北国の文化に、改めて興味をそそる意義深い旅であった。



金子卓義先生をお迎えしての 実技講習会

上野 鶴 陽

平成三年度の実技講習会は、日展会員・毎日書道展審査会員・創玄書道会理事 金子卓義先生をお迎えして、去る二月十六日(日) ホテル丸治において開催された。

久津美氏の司会で十時開会。白石宙和先生より、今回は参加者が多く嬉しい。金子先生を迎えて、能率のあがる勉強をしてほしいとの話があった。続いて重原副会長より講師の紹介があり、金子先生は、金子鳴亨先生のご子息で、作品は日展の審査員をされたこと、毎日書道展でも要職にあり、二十一世紀に向けて書道界の旗幟として期待されている。また今回の講習会も、創玄書道展を前にしての多忙な折にも拘らず、お引受け下さったとの話があった。

続いて、金子先生の講義に移った。広い会場は受講者でうめつくされ、それぞれの机上は墨もたっぷり用意され準備完了。先生から、今回は、顔真卿を取り上げることにしたとの話があった。顔真卿については、現在はやりではない(日展等でもあまり見られない)かも知れない

が、興味あるところとして唐顔真卿三稿をやってみることにする。書道は今日まで二大潮流があるといわれている。一つは王羲之を中心とするものであり、もう一つは顔真卿の流れをくむものである。これらはそれぞれ後々の世まで影響を与えており、その評価としては、創造的書をつつたこと、他は作品の数の多いことである。どちらの書風も幅を持っている。作品の振幅があり、時代的に創造的に仕事をしている。さらに顔真卿の人となりについて、時代的背景等くわしく話され、人物像が浮きぼりにされる。紙面もないのでそのすべてを記すことは出来ず何とも申しわけない。断片的に記して見ると。

親しみある顔真卿の書。よく一碑一面貌といわれているが、概にそうとは言えない。顔法の用筆には独自のものがあり、若い時代の多宝塔碑から一貫している。また、ちがう顔を持っていた書く内容により、ねじる…と気持の入れ方が違い、そこがまた魅力となっている。その形体は、どれも一見してわかる反面、

自分の心情を一つ一つに書き表わしている。祭姪文稿、争坐位文稿を見れば、感情、意識がよく理解出来るものと思う。三稿のうちでは、祭姪、争坐位がよい。(拓本を見せていただく)祭姪は、激しいリズム・抑揚。争坐位は、複雑なリズム・長い呼吸、粘り。楷書の用筆はあまり見られないが、筆の角度は楷書の時と同じように書いている。即ち根本的には直筆である。鋒先は線の中心をとり、ふくらみ、厚み…等を出している。顔真卿は何を習ったかについては、褚遂良の書法が出ていること、形は違うがリズムが似ている点など、かなり篆書を習ったのではない。あの独特な形は説文、小篆



も習ったか。自分の書に何かを求め、信念みたいなものを持って書かれたのであろう。祭姪は真跡本のほうがはつきりしており、すみずみまでわかる。顔季明に対する霊に奉げる悲しさ、残念さ、それらが記号(文字)を通して感情表現されており、そこが見どころである。顔真卿の情感の高まりを、それから受けた感動を臨書に。速さ、リズム、形、一本一本の線をどうするかも大事だが。争坐位は、魚朝恩の席が昔からのならわしと違うと抗議したもの、それらの事情等詳しい話がなされた。

前も午後受講生達は、時のたつのも忘れて書きすめる。最後に金子先生の条幅に臨書、五、六、七枚と精力的に書かれていく。まわりは、百人近い人達でうずまる。しかし会場は物音一つしない。ただ先生の顔真卿に対する深い感動が、筆の動きと表情が一体となって脈打って私の胸に伝わってくる。いつしか私は、固く手をにぎりしめていた。

懇親会での先生は終始にこやかに過ごされ、受講生一同楽しく意義ある一日であった。



第九回

栃木県書道連盟女流展

平成四年二月七日〜九日
栃木県総合文化センター

要約を。

二月一日に降った大雪が、会場の県総合文化センター入口の樹々のそちこちに消え残っていた。そんな低温ではあったが、会期中は晴天に恵まれ二月七日〜九日、第九回女流展が開催された。昨年より一週間早く県下の目ぼしい書展のトップを切つて。出品数一〇四点、会員が増えたにしては昨年より二点減、会員の五〇％といったところ。来年はもっと増えてほしいものである。会場も広くなったことであるから。

作品種別としては(昨年%)
かな二七％(20)小字数一三％
(25)漢字四一％(45)近代詩文二二％(7)一字書七％(3)以上百％。昨年よりかな、一字書、近代詩文などが大中に増加したこと。漢字の中に見応えのある隸体の臨書、篆刻が加わったことなどにより、作品がバラエティーに富んだものとなったことは喜んでよい現象といえよう。最終九日午後二時より、連盟副会長である齊藤笙風先生のご批評をいただいた。次にその

出品者個々の目標はそれぞれ異なるだろうが、一般に楽しんで書いているという印象を受けた。それを頭において批評したつもり。楽しんで書いている人に対する批評としては、それなりに考えてしなければならぬ。だが回を重ねることにレベルアップは心がけるべきである。かなり高度の作品もあったが、三・六版にまで取組んでいて意欲が感じられた。雅印の場所など研究してほしいものも若干あった。多字数三行ものについては、三行目の底辺が一線にならぬこと(落款を入れて尚かつ余裕を残す)、みせ場をどこへ作るか(実作品の前で大いに勉強になった)、仮名の料紙などは色の濃淡をよく見て、文字の置き方と墨の濃淡も併せ考えること。隸書の波法の一部だもつとよく原帖を見るように。一字書の偏と旁のバランスを考えるもの等々。会場の広さと作品の点数、飾り工合など恰度よい。(これには事務局の先生方と松島堂さん、其



他の男性若干の大奮闘のおかげ、後片付もその何倍かのお疲れ、とても女の手に見えるものではないということを銘記)。これぞ女流展と強調する為にもお花の彩りがほしかった。(反省)最後にもつと参観者を多くするためにアピールの方法を考えること。教室の生徒、友人知己にもつと宣伝する必要があるのではなからうか。——以上個人への評と話合いより

でも批評の中に、あとはということなしか、又は最初から、ほめられた作品もかなりあり、批評された四十四名の中には気分をよくした人が多かったことと思う。

先生は前日に微細なる下見をされ、ご自分の専門外の仮名等、万葉集まで繙かれ、それがきめ細かなご批評の中に加えられ、頭の下がるおもいがした。

作品は自分であることを思えば、個人は感性を磨き、芸術としての書に近づきたいものである。これこそ自分の書と胸を張って誇れるような独創性の垣間みられる作品となすべく今後歩みつづけたいものである。自分も含めて多くの人の作品を見接することによりお互いに研鑽する為にも、出品者が多くなることに期待しつつ欄筆。(菅原芳雅)



編集後記

諸先生方にはご多忙のところ、王稿をお寄せいただきまして誠にありがとうございます。尚、なれない者がやっておりますので、ご意見、ご希望等がございましたら編集係にお便り下さい。

大谷津紫水
久津美碧洋
癸生川天遊
赤澤 豊

第四十五回県芸術祭

中井史朗

第四十五回芸術祭が、新装の総合文化センターの柿おとしに展示された。新展示場への期待と興奮をなげまぜにして、みた。

書道部門は、出品点数三百十二点で、昨年より三十二点も多い新記録である。この会場に、

どれだけ展示可能か見当もつかなかったが、出来るだけ多くの入選をという審査員の一致した意見により、最終的に二百十四点を入選作として選んだ。審査にあたって、登竜門として新人発掘ということも、考慮に入れた。

出品作は漢字六五%、仮名一三%、少字数書七%、近代詩文

書三%、篆刻一二%という割合であった。現代書志向といわれる少字数書と近代詩文書が両方合わせて一〇%というのは、い

ささか心もとなく、指導層を含めて、大いに反省し、今後の展開を考えねばならない。

仮名についても、これからは大字仮名に移行すべきときにきているように思う。帖や冊子が認められていない芸術祭書道展としては、造型と流動が同時に眼に入るような作品として、細字はなるべく避けるべきであろう。

篆刻は、三十八点もの出品で、急激に増加を見た。中には、文字の造型だけで、文字学、書道

史の勉強をおろそかにしているものもあった。鉄筆の味を出してほしい。

さて、三分の二以上を占める漢字作品であるが、八尺×二尺のタテ長の型式のものが圧倒的に多く、しかも三行書きという最もまとめ易い類型的な書き方のものが目についた。手馴れた書きぶりというものは、失敗が少ない。しかし、同時に意欲に欠けた作になり易い。このことは、審査直後、審査員の一致した感想でもあった。なお臨書作品としてまとめることの難しさを審査を通して感じた。

◎芸術祭賞 沢田幽石「高青邱詩」
三行ものの中で、この書は空間が冴えて厳しさがあつた、草体の不自然な字もあつたが、調子の高さがそれと通じていた。

◎準芸術祭賞 穂山玉星「和歌」
上代様の用筆を手に入れた快作。流動の中に力づよさを秘めている。題名の「和歌」はいただけない。もう少し大字に挑戦してほしい。

◎準芸術祭賞 吉田芝更「碧潭夜月」
小判型に四字をよくまとめている。方寸の空間に余情を漂わせている。たのしい作。

◎芸術祭奨励賞 篠崎宏道「新」
圧倒的な迫力がありながら、空気は緊張感をもった白で支えられている。終筆がよい。

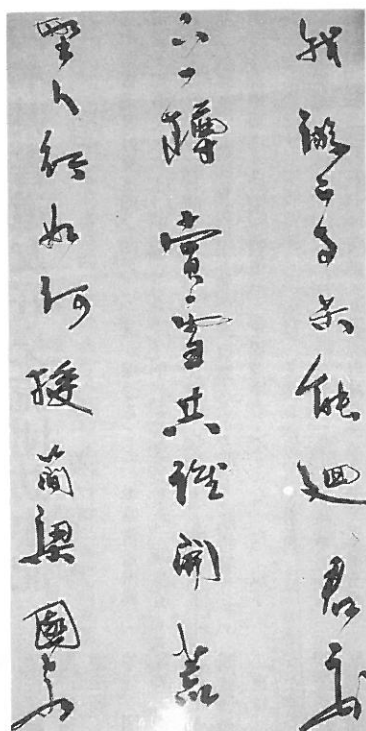
◎芸術祭奨励賞 石川六濤「沈吟期之詩」
三行ものの中で、この書は空間が冴えて厳しさがあつた、草体の不自然な字もあつたが、調子の高さがそれと通じていた。

デフォルメされた字が連綿さされているが、不自然さを感じさせない。暢達な作。

◎芸術祭奨励賞 久津美碧洋「良寛詩」
一作としてよくまとまった作。線に和みと響きを期待したい。素材が良寛というのが疑問。

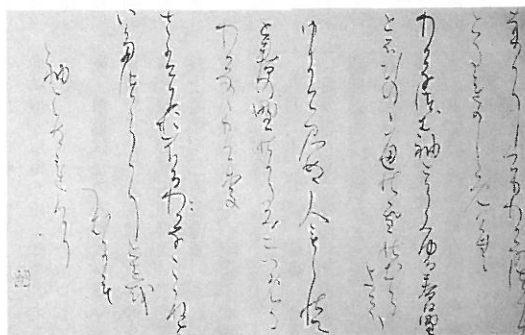
◎芸術祭奨励賞 猪爪清「咸陽城東樓」
切れ味のよい線が空間をよく押さえている。墨色がよくなかったことが悔まれる。

◎芸術祭奨励賞 大塚清岳「殷遙詩」
書き馴れた調子、無理のない流れ、潤渇の配分まことに見事に古格がほしい。



沢田 幽石 (部分)

穂山 玉星 (部分)



吉田 芝更



栃木県書道友好交流団訪中記

重 原 聖 鳥

栃木県書道友好交流団(団長 渡辺温子知事夫人)は、平成三年九月十九日から六日間、蘇州と並ぶ景勝地、浙江省杭州市、江南の古都紹興市を訪問「書道交流」をした。

交流団派遣の経緯は、平成二年四月渡辺知事及び六月小菅教育長が訪中の際に、浙江省側から「書道の交流」をしたい旨の要請があった。六月浙江省主催による「第一回浙江省書道芸術祭」開催にあたり訪中されるよう省文化庁庁長から要請があり、その後、知事夫人を団長とする書道交流団を編成し、訪中されるよう招待状が県へあった。

県当局は、浙江省との文化交



流が深まること、本県書道振興につながる事業と考え、県書道友好交流団(役員七、中学生四、高校生六、一般七、随員二)を派遣することとなった。以下は、そのレポートである。

九月十九日(木)。県議会議会館前を土砂降りの中出発。上海空港には、浙江省文化庁副庁長費静波、外事処処長呉本徳両先生要人の出迎え、更に杭州市ホテル「望湖賓館」では、省文化庁庁長銭法成先生の出迎えを受け、本県と浙江省の深い友好関係に団員一同ただただ感激するばかりであった。

九月二十日(金)。省博物館文瀾閣での書道芸術開幕式に全員出



席。演壇に、渡辺団長、重原副団長、新江秘書長が登壇。感激。式後、館所蔵作品、沙孟海書法展、省書法家精品展を鑑賞。

午後、団長と役員一行は、西湖賓館(省迎賓館)第一楼に、葛浜昇省長等要人を表敬訪問、熱烈歓迎を受ける。

夜は、省組織委員会主催歓迎レセプションが「花港飯店」で開催され、団員全員出席。楽器演奏を聞きながら楽しい一時を過ごした。

九月二十一日(土)。「日中青少年書道試合」(席書)は、省歌舞リハーサルホールで、県側十六名、中国側選抜者二十二名で、課題と自由作二作提出のルールで開催された。

夕刻、李副省長主催の夕食の宴へ、団長以下役員が招待される。二十五階の「杭州大賓」で



の宴は、美味と美酒、加えて暮色の展望は殊のほか印象的であった。

夜、書道試合の表彰式が華やかに挙行された。入賞者は次の通り。青年組一等賞大浦舟人。二等賞益子英明。三等賞全員。これも省要人のあたたかい配慮によるもので「謝謝」。

九月二十二日(日)、紹興。王羲之流派書展開幕式。「曲水の宴」。地元書法家との交流。曲水の宴では、銭先生の陰謀か、渡辺団長の前で笹舟が数多く止まり観衆から拍手がおこった。晴天のもと盛会であった。午後は市内観光。

夕刻、紹興飯店で沈副市长を表敬訪問。夕食を共にしながら、中秋の風習、酒宴のことなど歓談。夜は、県文化会館での中秋交換晩階に全員出席。雑枝觀賞、書道交流にと夜の更けるのも忘れるほどであった。

九月二十三日(月)。靈隱寺、西湖遊覧と終日観光。西湖は絶景。夜は栃木県主催レセプション。作品交換、記念品贈呈等があり酒杯を重ね盛会であった。

県が派遣した第一回文化友好交流は、大きな成果を納め、九月二十五日夕刻全員無事帰国した。



平成三年度会務報告

八	八	七	七	七	六	六	五	五
二九	二四	二七 二八・二九	二二	一四	二七	一〇	一九	一六・一九
本県書道四〇年のあゆみ再校正打合せ ホテル丸治 出席者 七海・諏訪・大谷津・久津美・癸生川・赤澤	下野書展賞選考委員 齋藤笙風・生田目史雲・池澤畔蒲・小川 仲秋・諏訪公道 宮城県立美術館・日本こけし館・中尊寺・鳴子温泉 詳細別記 第十六回下野の書展代表者打合せ ホテル丸治 出席者一名	下野新聞、「新・墨のこころ」の集い（前半） ホテル丸治 盛会 一泊研修旅行 参加三四名	第一回浙江書道芸術祭に参加する八名を選出 出席 中井・七海・齋藤・重原・赤澤	幹事会での協議事項を中心に本年度行事について協議した 実技講習会講師案 会員展批評会講師案・女流展・会員展 新し い県総合文化センターのため作品の規格寸法検討 第一回浙江書道芸術祭に参加する八名を選出	本県書道四〇年のあゆみ校正打合せ ホテル丸治 出席者 七海・諏訪・大谷津・久津美・癸生川・赤澤 第一回運営委員会 ホテル丸治 出席者二名	平成三年度行事計画協議○運営委員会○研修旅行 ○県芸術祭入賞入選者のつどい○実技講習会○女流展○会員展総会 本県書道四〇年のあゆみ校正打合せ ホテル丸治 出席者 七海・諏訪・大谷津・久津美・癸生川・赤澤	会員展 栃木会館上下ギャラリー 出品点数 一九六 会員展批評会 講師 貞香会顧問 佐藤中処先生 連盟古舟賞受賞者 鈴木源泉・高橋竹瑞・中原紅驥 総会 ホテル丸治 出席者一〇七名 議長 酒井真沙 会長白石宙和 副会長重原聖鳥 齋藤笙風留任 懇親会 ホテル丸治 出席者七七名 第一回幹事会 ホテル丸治 出席者八名	会員展 栃木会館上下ギャラリー 出品点数 一九六 会員展批評会 講師 貞香会顧問 佐藤中処先生 連盟古舟賞受賞者 鈴木源泉・高橋竹瑞・中原紅驥 総会 ホテル丸治 出席者一〇七名 議長 酒井真沙 会長白石宙和 副会長重原聖鳥 齋藤笙風留任 懇親会 ホテル丸治 出席者七七名 第一回幹事会 ホテル丸治 出席者八名
十二	十一	十一	十	十	九	九	九	九
五	二六	十一	一三	一八	二七	二四	二五	五
新しい県総合文化センターのため作品の規格寸法を検討した。 仕上り寸法 九〇×一八〇センチメートル以内、タテヨコ自由とした。	本年度行事報告、実技講習会、会員展、会員名簿、会報等の協議 第九回女流展打合せ ホテル丸治 出席者 重原・増淵・赤澤・荒井・齋藤美・齋藤和・小滝 山下・人見・菅原	連盟会員全員に郵送（会員負担金一五〇〇円）その他の関係に 贈呈した。 第二回幹事会 ホテル丸治 出席者一〇名	県芸術祭入賞入選者のつどい ホテル丸治 参加者一四〇名 来賓六名 盛会 本県書道四〇年のあゆみ発刊	県芸術祭美術展 一期 書道・日本画・工芸開催 県総合文化 センター 公募数三二二点 入賞八点 入選二二四点 中野永峰・松本宜響・谷島小楓	県芸術祭審査会 県総合文化センター 審査員 新井幽秋・重原聖鳥・高橋日傳・中井史朗 中野永峰・松本宜響・谷島小楓	第十六回下野の書展 東武デパート五階催事場 下野書展賞川俣古舟賞 沢田幽石・谷島小楓・手島映次受賞	第一回浙江書道芸術祭に中国浙江省へ 詳細別記 参加者 重原聖鳥・久津美碧洋・吉田景堂・大浦舟人・鶴見晨蒲 益子翠茗・日賀野琢・大木青雨・赤澤 豊	県芸術祭実行委員打合せ ホテル丸治 搬入搬出、会場当番等の役割を決めた。 第一回浙江書道芸術祭に中国浙江省へ 詳細別記 参加者 重原聖鳥・久津美碧洋・吉田景堂・大浦舟人・鶴見晨蒲 益子翠茗・日賀野琢・大木青雨・赤澤 豊

平成四年

二	二	三	四	四	一
二五	七	一九	二六	二六	二九
下野新聞「新・墨のころ」後半の集い ホテル丸治 第九回女流展 県総合文化センター第四ギャラリー 出品点数一〇四点 出品料一、〇〇〇円 批評会講師 副会長齋藤 笙風先生	実技講習会 ホテル丸治 講師 日展会員、創玄書道会理事 金子卓義先生 実技内容 祭姓文稿・争坐位文稿 出席者八五名 懇親会四二名参加 詳細別記 会報の内容(本年度) 打合せ ホテル丸治 内容と原稿依頼について協議 重原・大谷津・久津美・癸生川・ 赤澤	第三回幹事会 ホテル丸治 出席九名 会務報告・会員展・批評会・総会・研修旅行 中国浙江省西冷印社から二名を本県に招待する等を協議 第四回総会前の幹事会 ホテル丸治 出席一〇名 午後二時四時 会員展・批評会・総会・懇親会の順序と役割分担を決めた。 第二回運営委員会 ホテル丸治 出席三名	平成三年度会務報告、平成四年度事業案を協議 特に会員展飾付の人数の問題、一泊研修、十一月に西冷印社三名 本県に招待、会の規約見直し等について討議した。		

平成3年度 決算報告書

収 入 額 1,892,000円 (4,000×473)
95,722円 (前年度繰越金)
支 出 額 2,071,526円
繰越損失 83,804円

総 会	118,450	
展 覧 会	会 員 展	371,000 会場費・謝金 印刷・その他
	女 流 展	132,834 会場費・印刷 その他
会 議	顧 問 会	33,114
	運営委員会	86,590 2 回
	幹 事 会	115,579 4 回
研 修	実技講習会	252,791 会場費・謝金 その他
	見 学 会	128,062 通信費・ その他
会 報		101,831
通 信 印 刷		375,275
40周年誌記 念 準 備		200,000
会 員 名 簿		150,000
雑 費		6,000

平成4年度 予 算 案

収 入 額 2,000,000円 (4,000×500)
支 出 額 1,916,196円
83,804円 (前年度繰越損失)
残 高 0円

総 会	130,000	
展 覧 会	会 員 展	380,000
	女 流 展	150,000
会 議	顧 問 会	50,000
	運営委員会	120,000
	幹 事 会	120,000
研 修	実技講習会	260,000
	見 学 会	130,000
会 報		120,000
通 信 印 刷		400,000
会 員 名 簿 不 足		50,000
雑 費		6,196